

# 書籍紹介



鈴木 公明 編著 北沢 優樹 著  
秀和システム 刊

## 「図解入門ビジネス 最新 知的財産のデューデリがよ〜くわかる本」



タイトルどおり、知的財産のデューデリジェンス（デューデリ）を入門者にもよくわかるように解説した本です。日本においてもM&Aなる用語が常態化した昨今ですが、とりわけ最近では、知的財産を目的としたM&Aが新聞紙面等で見受けられるようになってきました。私自身、M&Aやデューデリには仕事上直接には関わりがありませんが、知財が絡んでいるのなら少しは知財デューデリを理解しなければと思い、本書を手取るに至りました。また、本書の内容が少なからず知財関係者に有益であると考え、この場をお借りしてご紹介させていただく次第です。

さて、冒頭から偉そうに述べてしまいましたが、実は私、本書を手取るまで知財デューデリジェンスはおろかデューデリという用語の意味さえ、よくわかっておりませんでした。本書「はじめに」によれば、デューデリとは、「対象企業（事業）を獲得しようとする企業が、対象企業（事業）が買収金額に見合った価値を有しているか監査すること」を指すようです。しかし、この説明を読んでも、具体的な監査手法のイメージがわかりません。こんな私のような入門者を置き去りにしないのが、本書の良さでもあります。M&Aとデューデリの正体について、第1章、第2章をかけて、丁寧に説明しています。

M&Aとデューデリについて概観したところで、第3章において監査対象として見た場合の知的財産の概要を紹介しています。こちらは逆に、M&Aやデューデリには詳しいけれども知財には縁が薄い、という方を想定しての内容となっています。

さて、これでデューデリと知財、各々についての概要をマスターすることができました。いよいよ本書のメインである、様々なデューデリの観点を知財に応用する場合の留意点などが、第4章から最終章の第10章までの膨大なページを割いて、大いに語り尽くされています。それは、ビジネス、

法務、財務の各分野におけるデューデリと知財との関係、会計基準の共通化がもたらす影響、知財の価値評価、契約上の留意点、統合プロセスに及ぶ広範な内容になります。

ところで、筆者の鈴木公明氏は特許庁OBであり、東京理科大学専門職大学院で准教授として教鞭を執るとともに東和知的財産研究所の所長を務め、高度知財マネジメントの普及・啓蒙に力を尽くされています。また、共著者の北沢優樹氏は、株式会社岡村製作所デザイン本部知的財産部勤務ですが、執筆当時は鈴木研究室に所属する社会人院生だったそうです。元審査官と現役知財部員のコラボレーションにより、知財関係者にも「知的財産のデューデリがよ〜く分かる」本書が完成したということになります。

本書はわかりやすい解説を展開するだけでなく、読者に3つのメッセージを伝えようとしています。それは、①企業における知財の重要性が高まっていること、②知財デューデリが法務の観点だけでは納まらないこと、そして、③企業の知財部門がM&Aやデューデリに積極的に関わっていくべきである、ということです。

しかし、本書の読了後すぐに、知財関係者が知財デューデリの実践を開始することは難しいかもしれません。本書はあくまで知財デューデリを体系的にまとめた入門書であって、専門家向けに細かい論点を網羅したり、ケーススタディを多数引用するスタイルにはなっていないからです。そこで役立つのが巻末の付録欄で、監査法人やコンサルティングファームが公表している論文などが、参考文献としてジャンル別に紹介されています。

まず本書で基礎知識を身につけ、しかるのちに付録欄の論文などで実践の準備を整え、そして再び本書の基本に立ち返る。そんな使い方が可能な、便利な一冊と言えるでしょう。

紹介者 特技懇常任幹事広報担当 保田 亨介